

# 温故知新

静岡県立中央図書館所蔵の貴重書紹介(13) 平成12年12月15日

静岡の文化人(その3)

和方家・花野井有年と『医方正伝』『駿河国雑志』

有年は寛政11(1799)年、駿府(静岡市)安西5丁目の煙草販売の商家に生まれました。幼少より学問好きで父から煙草の行商を命じられても、途中読書に耽ってしまい仕事にならない程で、父もやがて有年に家業を継がせる事を諦め弟に譲ってしまいます。定職を持たない有年は父から経済的援助を得て江戸、大坂で蘭方、漢方医学を学び、文政8(1825)年27歳の時駿府で蘭方医として開業します。ところが天保の大飢饉などで母や妻子を次々に失い、これを機に蘭方、漢方医学では病気は一向に良くならない、日本本来の環境に適した医方が必要でありそれが日本古来の医方であると和方家に転身します。この頃の記録は天保12(1841)年に書かれた『辛丑雑記』に詳しく書かれています。『辛丑雑記』は日記、随筆、論評などが主に書かれており、その序には「日記にもあらず随筆にもあざれば、これは名づくべきふしなくなんなりにたれば、ただ雑記といふ名をしるしおきけり」と書いてあります。各月に一冊を当てていますが上下2巻に分けた月もあり、総計19冊に達する彼の代表作のひとつです。

医学書として彼の代表作は嘉永4(1851)年53歳の時に書かれた『医方正伝』(490.9/24)で上下2巻からなります。上巻では「我が国の医法は天御祖神より代々受け継がれたものであるから外国に勝って非常に尊い正伝である」と説き、更に「我が国の医法の歴史を述べ、今の世の医学は御国風医と外国風医の2通りあるが外国風医法は効なく扱いにくいもの」と漢方、蘭方を批判しています。また下巻ではいろいろな治験例をあげ、病気の本体を知り神に従って行う日本古来の治療法を主張し、古書にあるように古来からの薬法を神髄に従うことが正しい(『医方正伝』)と結論しています。医学が科学的、実証的であらねばならないのに対し、有年のこの書は国学的、主観的、非実証的な理論を説き荒唐無稽な医書でした。平田篤胤を主とする、国学の復古精神に呼応して出現した蘭方、漢方医に対しての和方家でしたが、この時期一世を風靡するもののやがて衰退消滅してしまいました。

この他『駿河国雑志』(S209/5)は弘化(1846)年起草、嘉永5(1852)年再稿された駿河国の地誌で31巻。府中3巻を始め駿河国の町村の軒役、戸数や賤機山、浅間神社などの宗旨、祭事等を記録し、すべての項目を挙げ簡単明瞭に説明しています。同種の書に天保14(1843)年阿部正信編の『駿国雑志』があります。

有年は慶応元(1865)年11月24日67歳で没し、静岡市安西1丁目の瑞光寺に葬られました。また静岡市羽鳥、安倍川と藁科川合流部にある木枯の森(昭和29年県文化財指定)には有年作の歌碑があります。

「ふきはらふ こすえのおとは しづかにて  
名のみたかき こからしのもり」

## 【参考文献】

- 『清見瀉』6号(SZ22/28)
- 『本道楽』1,2号(SZ02/1)

『医方正伝』上巻序の部分